

令和3年度「全国学力・学習状況調査」の結果 —分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

区 名 浪速区

学 校 名 大阪市立栄小学校

学校長名 島田 武

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和3年5月27日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数）に関する調査」と「児童質問紙調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・ 国語
- ・ 算数

(2) 質問紙調査

- ・ 児童に対する調査
- ・ 学校に対する調査

3 調査の対象

- ・ 国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・ 小学校では、第6学年 32 名

令和3年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語では、「言葉の特徴や使い方に関する事項」「書くこと」の領域において全国平均を上回ったが、「読むこと」「話すこと・聞くこと」の領域においては全国平均を下回った。また、国語の記述式の回答についての本校の無回答率は全国の無回答率を上回り課題が明らかになった。

算数では、「数と計算」「測定」の領域において全国平均を上回ったが、「図形」「変化と関係」「データの活用」の領域においては全国平均を若干下回った。

児童質問紙においては、「自己有用感」「達成感」「主体的・対話的で深い学びからの授業改善に関する取組」については、肯定的な回答が多く全国平均を大きく上回る結果となった。

分析から見てきた成果・課題

教科に関する調査より

個別最適化された学びの育成に向けて、授業改善に向けた外部人材を活用した研修の充実や学習教材の充実を図ったり、情報活用能力の育成に向けて、一人1台学習者用端末の効果的に活用した取組を行うことで、児童の学ぶ力が高まっている。

〔国語〕本校と全国の標準偏差を比べると、本校の方がばらつきが少ない。本校の中央値は全国の中央値と同じである。本校の平均正答数は全国の平均正答数より約0.5問少ない。本校児童の課題は、「文章全体の構成を捉えて要旨を把握すること」「目的に応じて、文章と図表などを結びつけるなどして必要な情報を見つけること」「目的を意識して、中心となる語や文を見つけて要約すること」の読みの力と、「自分の考えが伝わるように資料を用いる際の表現を工夫すること」の話す力である。

〔算数〕本校と全国の標準偏差を比べると、本校の方がばらつきが少ない。本校の中央値においては全国の中央値と1問乖離がある。本校の平均正答数は全国の平均正答数よりも約0.3問少ない。本校児童の課題は、図形の面積の求め方を理解するとともに、求める際に必要な情報を図形から選び出したり、図形の構成の仕方を捉えて必要な長さを求め、図形の面積の公式を用いたりする力である。また、データの活用において、複数のデータから項目間の違いに着目し、データの特徴や傾向を読み取ったり、設定した問題に対して集めるべきデータを判断したりできる力である。

質問紙調査より

本校は、児童が互いに声をかけ合い、学校の仲間として認め合えるように、たてわり活動や異学年交流を図っている。また、人権教育をSDGsの視点と関連付けながら進めるために、教科・領域の学習を横断的・総合的に取り組む年間指導計画を作成するとともに、必要に応じて地域の施設を活用したり、人材を招いたりして、児童が主体的に取り組めるようにし、学習したことを学校全体に広める取組の充実を図っている。

「自分には、よいところがあると思いますか」「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」「5年生までに受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめたり、思いや考えをもとに新しいものを作り出したりする活動を行っていましたか」等、自己有効感や主体的・対話的で深い学びからの授業改善に関する取組状況については、本校は大変良好な状態である。

今後の取組(アクションプラン)

授業改善に向けて、情報活用能力の育成に向けた一人1台学習者用端末の効果的な活用や研修の充実及び外部人材の活用、学習教材の充実を図る。

◆読解力向上に向けた取組

読みの視点として、第一段階の読みは、内容（情報）について、何がどのように書かれているかを読むための「確認をする読み」である。第二段階の読みは、論理（展開や述べ方）について、なぜそのような事柄をとりあげたのか、なぜこの順序で書いたのか、なぜそのように書き出したのかを読むための「解釈する読み」である。これらの意味付けし、表現の仕方（伝え方）を推論できるようにする必要がある。第三段階の読みとしては、主張はわかりやすいか？納得できるか？筆者との対話や自分との対話を通して読む「評価する読み」である。「確認をする読み」「解釈する読み」「評価する読み」の3つの読みを柱とし、連続テキストと非連続テキストのつながりを明確にし、情報の取り出しや整理を行いながら読解力の向上を図る。

◆算数科の個別最適化した学びに向けた授業改善

必要なレディネステストを行ったり、単元が始まるまでにモジュール学習の時間や家庭学習を通して、関連する学習内容を想起できるようにする。児童の習得状況に応じて習熟度別分割授業を行い、条件を変えた問題や学習したことを活かして解決する問題を通して、考え方を広げ深めるよう授業改善を図る。加えて、練習問題・活用問題による確実な習得を図る。基礎的基本的な学力の定着を図るため、学年の実態に応じた反復練習などの課題に取り組む時間を週2回以上設定する。